

グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門活動報告

【1】比較日本学教育研究部門運営委員会

神田由築（比較社会文化学）、浅田徹（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、埋忠美沙（比較社会文化学）、遠藤みどり（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、竹村明日香（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、谷口幸代（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、藤川玲満（比較社会文化学）松岡智之（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、宮尾正樹（比較社会文化学）、本林響子（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

- 第1回 2020（令和2）年6月23日
- 第2回 2020（令和2）年7月5日
- 第3回 2020（令和2）年9月11日
- 第4回 2020（令和2）年10月23日
- 第5回 2020（令和2）年11月9日
- 第6回 2020（令和2）年12月18日

【2】比較日本学教育研究部門研究委員会

神田由築（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、埋忠美沙（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、田中琢三（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、宮尾正樹（比較社会文化学）、宮下聡子（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

【3】【中止】第22回国際日本学シンポジウム

テーマ「高度経済成長期における食生活の変化」
主催：グローバルリーダーシップ研究所

——比較日本学教育研究部門

共催—国立歴史民俗博物館

日程：2020（令和2）年7月19日（日）

場所：お茶の水女子大学—本館306室

コーディネーター：宮内貴久（お茶の水女子大学）

▽新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催中止といたしました。

【4】第15回国際日本学コンソーシアム

「伝わる・伝える」

主催：グローバルリーダーシップ研究所

比較日本学教育研究部門

▽原稿の寄稿により実施

○日本文学部会

范淑文（国立台湾大学・台湾）

「3・11文学—被災地出身作家が伝えるもの—」

森暁子（お茶の水女子大学）

「下る物の品々—斎藤徳元『尤之双紙』の遊び心—」

○日本文化部会

潘蕾（北京外国語大学・中国）

「現代を生きる—「物」から「者」に伝えるもの—」

遠藤みどり（お茶の水女子大学）

「「後宮」の伝来と定着」

湯川文彦（お茶の水女子大学）

「「文明開化」の伝え方—明治初期『東京日日新聞』の取り組みを中心に—」

芹澤良子（お茶の水女子大学）

「戦時下における学知の伝播—第四回国際らい会議の成果はどのようにして日本に伝わったのか—」

○日本語学・日本語教育学部会

日本語学部会

朴美賢（釜山大学校・韓国）

『『釈日本紀』における韓国系固有名詞の線点の資料性について』

金杉ペトラ（カレル大学・チェコ）

「構文文法における対照の可能性—「～てくる」構文、「come+V-ing」・「come+toV」構文の比較—」

日本語教育学部会

トムソン木下千尋（ニューサウスウェールズ大学・オーストラリア）

「日本語を伝える—オーストラリアにおけるケイショウゴとしての日本語—」

○全体総括

神田由築（お茶の水女子大学）

【5】コンソーシアム実行委員会

部門長：神田由築

日本文学部会：谷口幸代、藤川玲満

日本文化部会：大薮海、神田由築

日本語・日本語教育学部会：

石井久美子、竹村明日香、本林響子

【6】第1回国際日本学講演会

テーマ「英国における『日本』展

—大英博物館企画展を事例として—」

主催：グローバルリーダーシップ研究所

比較日本学教育研究部門

日程：2020（令和2）年11月25日（水）

オンライン開催

講演者：松葉涼子

（セインズベリー日本藝術研究所）

司会：神田由築（部門長）

【7】第2回国際日本学講演会

テーマ「戦前上海における日本人居留民社会に

関する研究」

主催：グローバルリーダーシップ研究所

比較日本学教育研究部門

日程：2020（令和2）年12月12日（土）

オンライン開催

講演者：張智慧（上海大学）

コメント：渡辺千尋（東洋大学）

司会：神田由築（部門長）

研究プロジェクト活動報告

1. 明治・大正期の日独思想・文化交流の 多角的研究

- ①主旨：北欧作家ラーゲルレーヴの日本における紹介者であるドイツの思想学者グンデルトと、その周辺の作家・思想家・知識人を中心に明治・大正期の独仏思想・文化交流を研究する。
- ②プロジェクト担当者：田中琢三（本学教員）
- ③学内研究員：なし
- ④学内協力員：なし
- ⑤客員研究員：加藤敦子（都留文科大学）、兼岡理恵（千葉大学）、中丸禎子（東京理科大学）
- ⑥研究協力員：なし
- ⑦活動経過：
〔口頭発表〕
 1. 田中琢三「ダレーの「血と土」のイデオロギーの諸相と日本における受容」、プロジェクト人魚第40回研究会、2020年10月31日（オンライン開催）
 2. 中丸禎子「明治・大正期のキリスト教における北欧受容：内村鑑三とヴィルヘルム・グンデルトを中心に」、北ヨーロッパ学会2020年度研究大会、2020年10月4日（オンライン開催）
 3. 中丸禎子「香川鉄蔵とイシガオサム 無教会の北欧受容」、プロジェクト人魚第41回研究会、2020年11月25日（オンライン開催）

2. 英語・日本語における食べ物に対する 感覚評価と文化的アイデンティティ Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity in English and Japanese

- ①主旨：日本語と英語における、食べ物に関する味覚や嗅覚などについての感覚評価の表現について分析する。それらが日英の文化的なアイデ

ンティティ形成とどのように結びつくか等について、インタビューや会話等を材料として研究する。

We propose to investigate how people describe their taste preferences and experience food in English and Japanese. We will use interviews, surveys and sensory evaluative conversations to investigate how people do use verbal/nonverbal behavior to assess food, influence one another's preferences, and construct identities.

- ②プロジェクト担当者：香西みどり（本学教員）
- ③学内研究員：石井久美子（本学教員）
- ④学内協力員：なし
- ⑤客員研究員：ポリー・ザトラウスキー（米・ミネソタ大学）、福留奈美（東京聖栄大学）、星野祐子（十文字学園女子大学）
- ⑥研究協力員：なし
- ⑦活動経過：

本年度の本プロジェクトに関する研究成果は下記の通りである。

【著書・編著・分担執筆など】

Szatrowski, Polly. 2019/e-edition 2020 Tracking references to unfamiliar food in Japanese Taster Lunches: Negotiating agreement while adapting language to food. The Japanese language from an empirical perspective: Corpus-based studies and studies on discourse, ed. by Irena Srdanović and Andrej Bekeš 53-75. Ljubljana, Slovenia: University Press, Faculty of Arts= Znanstvena založba Filozofske fakultete.

<https://e-knige.ff.uni-lj.si/DOI:10.4312/9789610602170>

ザトラウスキー、ポリー（編）『五感で楽しむ食の日本語』くろしお出版（近刊）

【論文・報告書・予稿集など】

ザトラウスキー、ポリー「食べ物に対する態度はどのように作り上げられるか―食の会話を例にして―」第11回日本語実用言語学国際会議(ICPLJ11) 予稿集、国立国語研究所、2020年、pp.2-7

福留奈美、高頭ルーシー「連載：yummyだけじゃない！オノマトペのおいしさ表現」『英語教育』大修館、令和2年4月から令和3年3月まで毎月1頁連載

【学会発表・招待講演など】

福留奈美「日本語学習者におけるオノマトペの習得段階と学習到達目標」日本語教育学会2020年春季大会、2020年5月（ポスター発表）

福留奈美「食べ物の命名と記憶の描写 ―おいしく食べる体験の言語化―」電子情報通信学会思考と言語研究会、2020年10月（招待講演）

福留奈美「日本語オノマトペの基本語彙選定と分類―語彙教材の頻度分析の場合―」日本語教育学会2020年秋季大会、2020年11月（ポスター発表）

ザトラウスキー、ポリー「食べ物に対する態度はどのように作り上げられるか―食の会話を例にして―」第11回日本語実用言語学国際会議(ICPLJ11)、国立国語研究所2020年12月19日（オンライン）

3. 少女雑誌にみる外来語の総合的研究

①主旨：明治末から昭和半ばにかけて発行された、少女対象の総合雑誌『少女の友』を資料に外来語を調査する。子ども向けに用いられている外来語というのは定着度が高く、当時、世代を問わずに用いられたと考えられる。それらがどのような特徴を持つのか、既存のコーパスや、当時刊行されていた外来語辞典との比較から明らかにする。

②プロジェクト担当者：石井久美子（本学教員）

③学内研究員：なし

④学内協力員：河野礼実（本学院生）、野口芙美（本学院生）、宇野和（本学院生）、ムニラ・クルボノヴァ（本学院生）、前田ゆかり（本学院生）

⑤客員研究員：なし

⑥研究協力員：なし

⑦活動経過：

本プロジェクトは、JSPS科研費の助成18K12396若手研究「少女雑誌にみる外来語の総合的研究」を受けて行っているもので、本年度が最終年度である。

昨年度から行っていた『少女の友』という少女雑誌からの外来語の抽出と、それをExcelに入力しデータ化する作業を継続した。コロナ禍においても、資料等を郵送するという方法に切り替えることで、学生にテレワークで研究補助を依頼することができた。授業の履修者を中心に作業者を募り、夏から年末にかけてこの作業を精力的に行った。納品されたデータを確認・修正し、データベース化することができた。

また、研究成果として、以下の2件を執筆した。(1)は2021年5月刊行予定、(2)は2021年中の刊行が決まっている。

(1) 石井久美子「大正期の『少女の友』の食のことば」『五感で楽しむ食の日本語』くろしお出版（印刷中）

(2) 石井久美子「大正期の少女雑誌『少女の友』に見る一般名詞の外来語の特徴」『日本語語彙論』外語教学与研究出版社

4. 現代における民俗学の再構築

①主旨：現代における民俗学の再構築を目指して、以下の三つの課題の実現を目指す。①先鋭化：民俗学の先人たちを乗り越え、新たな理論の構築を目指す。②実質化：民俗学において自明視されていた知的前提や技法を明晰に表現し、他分野との対話と開かれた議論の土台を作り出す。③国際化：国際的な広がりや前提とし

た日本民俗の把握を推し進めるとともに、世界各国の民俗学との交流を確立する。

- ②プロジェクト担当者：宮内貴久（本学教員）
- ③学内研究員：なし
- ④学内協力員：なし
- ⑤客員研究員：飯倉義之（國學院大學）、及川祥平（成城大学）、川田牧人（成城大学）、川森博司（神戸女子大学）、島村恭則（関西学院大学）、菅豊（東京大学）、塚原伸治（茨城大学）、徳丸亞木（筑波大学）、野口憲一（日本大学）、俵木悟（成城大学）、古家信平（筑波大学）、渡部圭一（筑波大学）
- ⑥研究協力員：なし
- ⑦活動経過：

・研究会「民俗学の論点2020」

日時：2020年10月25日（日）13：00～17：00

会場：オンライン開催

岩本通弥（東京大学）『『日常』が問うもの』

俵木悟（成城大学）「古くて新しい『日常』の課題の再発掘」

加藤幸治（武蔵野美術大学）『『フィールドとしての農村』という課題』

内山大介（福島県立博物館）「多様化する文化政策と民俗学」

菅豊（東京大学）「民俗学をもっとひらこう」

土居浩（ものづくり大学）「言うてるコトと、為してるコトとの間で考える」

三隅貴史（関西学院大学大学院）『『記述の学』を超えて：現代民俗学の方向性にかんする一考察』

川松あかり（東京大学大学院）「私たちは〈誰〉に向き合っているのか」

島村恭則「新世代への期待と支援：現代民俗学の発展的再生産のために」

・研究会「死者と生者をつなぐアート—多様な慰霊を生み出す想像力と創造力—」

日時：2020年11月7日（土）13：00開始

会場：オンライン開催

（オンライン会議システムZoomを使用）

コーディネーター：菅豊（東京大学大学院情報学環・学際情報学府）、西村明（東京大学大学院人文社会系研究科）

司会：菅豊

・研究会「フィールドとしての農村・再考」Part.1「農民文学／農村問題から民俗学史を拡張する」

日時：2020年12月6日（日）13：00～16：00

会場：オンライン開催

（オンライン会議システムZoomを使用）

コーディネーター：加藤幸治（武蔵野美術大学）、内山大介（福島県立博物館）、菅豊（東京大学）

問題提起：加藤幸治「課題としての「土」—もうひとつの「野の学問」の水脈—」

今井雅之（宮城県教育庁）「吉田三郎・幻の農民文学「我田引水」」

内山大介「体験と実践のフィールド学—昭和期東北の農村問題と山口弥一郎—」

・研究会 Drinking from the Cosmic Gourd

日時：2020年12月9日（水）18：00～21：00

会場：オンライン開催

講師：

フランシス・B・ニャムンジョ（ケープタウン大学）

ディスカッサント：

ディヴァイン・フー（ケープタウン大学）

太田至（京都大学）

松田素二（京都大学）

栗本英世（日本アフリカ学会会長、大阪大学）

齋藤剛（神戸大学）

5. 哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究

A comparative study of philosophy, ethics, religion and scientific thought

- ①主旨：日本人研究者と各国の研究者・留学生が

協力して、日本、西洋、東洋の伝統思想や現代哲学の比較研究を行うことによって、日本思想、西洋思想、東洋思想の特殊性、独自性を浮き彫りにすると同時に、共通点についても理解をふかめる。さらに、人間の存在構造、認識構造の普遍性についても明らかにする。日本思想史、西洋思想史、東洋思想史の研究者の意見交換によって幅広い視点から問題を考察する。

- ②プロジェクト担当者：高島元洋（本学名誉教授）、中野裕考（本学教員）、宮下聡子（本学教員）
- ③学内研究員：三浦謙（本学教員）、吉田杉子（本学非常勤講師）
- ④学内協力員：清水真裕（本学院生）、大持ほのか（本学院生）、飯田明日美（本学院生）、阿部雅（本学院生）
- ⑤客員研究員：頼住光子（東京大学）、徐翔生（台湾・政治大学）、森上優子（文部科学省）、木元麻里（文部科学省）、斎藤真希（静岡大学）、小林加代子（中京大学）、清水恵美子（茨城大学）
- ⑥研究協力員：鈴木朋子（東京都立大学）、荒木夏乃
- ⑦活動経過：

本年度は、本プロジェクトで自主的に以前から行っている研究を継続することができた。

◆近代比較思想研究会：本プロジェクトの一環として研究会を定期的に開催した。近代日本の思想家を、世紀転換期の日本と西洋における思想の動向の中に位置づけ、その思想の特色や意義を明らかにすることを目的とする。月一回程度の研究会を開催し、国内外の参考資料に目を通し議論を交わすとともに、学外における研究会報告、論文投稿などを行っている。メンバーは客員研究員の森上優子氏、清水恵美子氏、研究研究員の鈴木朋子氏である。今年度も多くの思想家を取り上げ、その思想や信仰の相違点と共通点を浮き彫りにするため、テキスト分析や国内外の思潮との関係性などを検討した。

◆日本倫理思想輪読会：日本倫理思想輪読会：本プロジェクトの一環として、輪読会を不定期に6回、オンラインで開催した（うち1回は、昨年3月に実施できなかった分である）。日本倫理思想史上で注目したい文献について、その解釈を検討し合った。本年度は昨年続き、折口信夫『古代研究Ⅰ 民俗学篇1』を対象とした。中心となるメンバーは研究協力員の荒木夏乃氏、学内協力員の清水真裕氏、大持ほのか氏、阿部雅氏である。

◆古事記（伝）研究会：本プロジェクトの一環として、日本思想の原点となる倫理思想を探究すべく『古事記』および本居宣長『古事記伝』を精読する研究会を6回開催した。日本思想の専門家の大久保紀子氏、西洋哲学の研究者高橋幸平氏、矢島壮平氏、中野裕考氏が自由にテキストに向き合い議論した。西郷信綱、神野志隆光らの現代の注釈、さらにはそれ以前の代表的な日本書紀注釈や古事記本文の諸本の異同も参照しつつ、多様な読解の可能性を探究した。

6. 天文計算を支えた日本の女性たち

- ①主旨：電子計算機が導入される以前の日本では、天文計算は算盤・計算尺・手廻し計算器などを用いて行われていた。そして、その膨大な計算作業の多くは女性によって支えられていた。なぜ天文計算が「女性の仕事」とみなされていたのか。そして、どのような経緯で彼女たちは天文計算の仕事に就いたのか。緯度観測所関連資料群等の歴史資料調査から、近代日本の天文計算を支えた女性たちの歴史を学際的（史料研究・科学技術史・ジェンダー研究・教育史）に考察する。
- ②プロジェクト担当者：新井由紀夫（本学教員）
- ③学内研究員：宮内貴久（本学教員）
- ④学内協力員：なし

⑤客員研究員：馬場幸栄（一橋大学）

⑥研究協力員：なし

⑦活動経過：

本年度は、かつて緯度観測所（岩手県）で計算係として勤務した女性たちの経歴等を明らかにするため、岩手県に現存する個人収蔵資料の史料調査や緯度観測所関係者への聴取調査を実施した。新型コロナウイルス感染拡大防止のため現地での史料調査は中止せざるをえなかったが、史料の貸与・移送に関する許諾を所有者からいただくことができたため、史料の一部を一時的に預かり都内で史料調査を実施した。聴取調査についても対面インタビューは中止せざるをえなかったが、かわりに電話・メール・手紙等を用いて関係者への質問を行った。研究成果は以下の学会・雑誌で発表したほか、新聞での連載や取材協力も行った。

- ・馬場幸栄「国立天文台水沢のコンピュータ史一算盤からスパコンまで」日本科学史学会第67回年会，2020年5月31日，於：オンライン発表。
- ・馬場幸栄「緯度観測所の集合写真に記録された袴姿の女性所員たち」日本天文学会2020年秋季年会，2020年9月8日，於：オンライン発表。
- ・馬場幸栄「緯度観測所ガラス乾板写真のインターネット公開」『国立天文台ニュース』No.327，国立天文台ニュース編集委員会，2020年10月1日，pp.10-11。
- ・馬場幸栄「緯度観測所と水沢の公立女学校」日本天文学会2021年春季年会，2021年3月17日，於：オンライン発表。

7. 大和国における都市奈良の位置付け

Positioning of city Nara in Yamato Province

①主旨：奈良は古代には都が置かれ、中世には事実上大和国を支配していた興福寺が存在した。

近世・近代においても、大和国および奈良県の中心地であったことに疑問の余地はない。しかし、大和国全体でみたときに、奈良はあまりにも北側に寄りすぎており、一国支配の拠点として相応しい場所とはいえない。それでも中世以降、奈良が支配の拠点とされたのはなぜなのか。大和国内での奈良の政治的・経済的位置付けの検討を中心に、京都との関係も視野に入れながら、考察を行う。

In Nara, the capital was located in ancient times, and in the Middle Ages there was Kofukuji Temple (興福寺), which virtually ruled Yamato Province (大和国). There is no doubt that it was the center of Yamato and Nara prefectures (奈良県) even in the early modern period. However, when looking at Yamato Province as a whole, Nara is too close to the north side, and it cannot be said that it is a suitable place as a base for one-country rule. Still, why has Nara been the base of control since the Middle Ages? Focusing on the political and economic position of Nara in Yamato, we will consider the relationship with Kyoto.

②プロジェクト担当者：大藪海（本学教員）

③学内研究員：新井由紀夫（本学教員）、神田由築（本学教員）

④学内協力員：なし

⑤客員研究員：内田滢子（医療創生大学）、巽昌子（東京都立大学）

⑥研究協力員：池田美千子（元本学AA）、永井瑞枝（本学AA）、柳澤京子（元本学院生）

⑦活動経過：

本年度はコロナ禍のために研究活動全般が大きな制約を受けた。そのため本研究プロジェクトも目立った研究活動を行えなかったが、年度末の3月に研究報告会をオンラインで開催し、今後の活動方針についてもメンバー間で意見交換を行った。

そのほか、プロジェクトメンバーの研究活動

としては、①大藪海「応仁の乱」（高橋典幸編『中世史講義【戦乱篇】』筑摩書房、2020年）、②大藪海「幕府から武力を期待された公家衆【伊勢北畠氏】」（日本史史料研究会監修・神田裕理編『ここまでわかった 戦国時代の天皇と公家衆たち 天皇制度は存亡の危機だったのか？【新装版】』文学通信、2020年、2015年出版のものを一部修正）、③大藪海「北畠親房は、保守的な人物だったのか？」（日本史史料研究会監修・呉座勇一編『南朝研究の最前線 ここまでわかった「建武政権」から後南朝まで』朝日新聞出版、2020年、2016年出版のものに加筆・修正）、④大藪海「北畠親房―後醍醐・後村上を支えた南朝の指導者」（亀田俊和・生駒孝臣編『南北朝武将列伝 南朝編』戎光祥出版、2021年）、⑤大藪海『応仁・文明の乱と明応の政変』（吉川弘文館、2021年）、⑥永井瑞枝「古代律令国家と恩赦制度―一獄からの解放」（『高梨学術奨励基金年報』令和元年度、2020年）などがある。これらのうち⑤では、応仁・文明の乱が起きていた時期の奈良について概観する項目を設け、荒廃した京都に代わって奈良が文化の中心地となっていたことや、京都からの避難民の受入先となった興福寺に莫大な経済的負担がかかっていたことを指摘した。

8. 近現代における日本文化の総合的研究 Comprehensive Study of Japanese Culture in Modern Times

①主旨：これまで近現代の日本文化に関する研究は各分野において進められてきたが、分野間の交渉は稀薄であり、研究の蓄積にしたがって日本文化の総合的な理解はむしろ困難になってきたように思われる。そこで本研究プロジェクトでは、近現代における日本文化の形成・変容について、各分野の知見をふまえつつ多面的に検討することにより、日本文化の歴史的・現代の特性を明らかにすることを目指した。具体的に

は特に、政治、思想、経済、教育、生活などの多様な視点から、近現代の日本文化に対する捉え方・歴史観を見直し、一連の分析結果を総合することによって新たな研究の視点や論点を提起した。

Conventional researches on modern Japanese culture have been developed in various fields, but relations between each field are rare, and as researches accumulate, it becomes more difficult to comprehensively understand Japanese culture. In this research project, we aim to clarify the historical and modern characteristics of Japanese culture by examining the formation and transformation of Japanese culture in modern times, based on the knowledge of each field. Specifically, from a variety of perspectives such as politics, ideology, economy, education, and living, we have reviewed the way of thinking and history of modern Japanese culture, and integrated a series of analytical results to provide new perspectives and issues.

- ②プロジェクト担当者：難波知子（本学教員）、湯川文彦（本学教員）
- ③学内研究員：宮尾正樹（本学教員）、宮内貴久（本学教員）、石井久美子（本学教員）
- ④学内協力員：加藤絵里子（本学院生）
- ⑤客員研究員：鈴木淳（東京大学）
- ⑥研究協力員：福田千絵（本学修了生）
- ⑦活動経過：

（1）学会・研究会等

◆教育史学会第64回大会（2020年9月26～27日、於武蔵野美術大学／オンライン開催）
同大会に参加し、第6分科会にて研究発表（湯川文彦「明治18年教育政策の再検討」）を行った。これまで財政難によるなし崩しの後退が特徴とされてきた明治18年の教育政策について新史料を交えて再検討し、実際には財政事情を考慮しつつも教育の質的向上を目指し、以後の教育政策の原型を作り出すという積極的意義が

あったことを明らかにした。

(2) その他

- ・湯川文彦「明治維新と議会制導入」(『日本歴史』第872号、2021年1月)
- ・湯川文彦「『文明開化』の伝え方—明治初期『東京日日新聞』の取り組みを中心に—」(『比較日本学教育研究部門研究年報』第17号、2021年3月)
- ・湯川文彦「明治維新のなかの『保守』—明治18年の教育政策をめぐって—」(『人文科学研究』第17巻、2021年3月)

9. 歌舞伎と出版文化

Kabuki Plays and the Publication Culture

①主旨：江戸時代、歌舞伎の台本はそのままの形で出版されることはなかった。歌舞伎とは役者の魅力とその肉体表現によって初めて完成するもので、台本はその見取り図、という認識が強かったためである。その一方で江戸後期になると演劇と文学は接近し、歌舞伎の興行に基づいた合巻「正本写」が出版されるようになった。それにおいては、歌舞伎を表現するためにいかなる手法が用いられたのだろうか。また、逆に歌舞伎は合巻からいかなる影響をうけてきたのだろうか。昨今の上演活動も視野に入れつつ、合巻との関係を通じて歌舞伎のメディアミックスを考察する。

In the Edo Period, kabuki play scripts never got published in their original forms. Because kabuki plays were thought to be completed with the attraction and physical expression of kabuki actors, while kabuki play scripts were thought of as rough sketches of kabuki plays. Meanwhile, the theater came close to the literature in the late Edo Period, and Shohon-utsushi-gokan based on kabuki shows had been published since then. Regarding to this matter, what approaches had been used to express kabuki plays? Moreover, did kabuki plays have been

influenced by Gokan picture books on the contrary?

This study focuses on the media mix of kabuki plays through the relationship with Gokan picture books while bringing recent presentations of kabuki plays into view.

- ②プロジェクト担当者：埋忠美沙（本学教員）
- ③学内研究員：神田由築（本学教員）
- ④学内協力員：なし
- ⑤客員研究員：嶋崎聡子（UCLA）
- ⑥研究協力員：なし
- ⑦活動経過：

当プロジェクトは本年度から開始した。本年度の活動は主に4つである。

1, 埋忠美沙『江戸の黙阿弥——善人を描く』(春風社、2020年12月) 出版

黙阿弥の作品研究の資料として「正本写」を用いており、当プロジェクトの基本的な研究として位置づけられる。

2, トークイベント「歌舞伎とマンガ」開催(2020年12月1日お茶の水女子大学)

埋忠が担当する「未来へつなぐ伝統芸能」プロジェクトに関わるイベントである。漫画は「絵を主体とした出版物」という点で、合巻(草双紙)の水脈にあるといえるが、近年歌舞伎は『ワンピース』『NARUTO—ナルト—』『風の谷のナウシカ』など、漫画を題材とした作品を相次いで上演している。こうした上演活動を踏まえ、歌舞伎俳優の坂東巳之助氏と、『週刊少年ジャンプ』(集英社)編集長の中野博之氏をゲストにお迎えし、その制作の様相や歌舞伎と漫画の親和性についてお話をうかがった。

3, 坂東巳之助×中野博之×埋忠美沙「歌舞伎とマンガ」執筆

上記2「トークイベント「歌舞伎とマンガ」」の内容を再構成し、本誌『比較日本学教育研究部門研究年報』17号に掲載した。

4, 『〔未翻刻戯曲集・27〕 菖蒲太刀対侠客』出版

埋忠が、国立劇場調査養成部編『〔未翻刻戯曲集・27〕 菖蒲太刀対侠客』（日本芸術文化振興会、2021）の出版に従事した。歌舞伎の未翻刻台本の出版事業で、『菖蒲太刀対侠客』の校訂と解題・梗概の執筆をおこなった。

グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門 年報研究論文投稿規定

本研究年報はお茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門の研究年報である。

1. 掲載資格

- ・投稿論文：投稿資格を有するのは原則として本部門員、及び研究プロジェクトの学内研究員、客員研究員、研究協力員とする。
- ・公開講演会、コンソーシアムなど、部門が行う各種催しにて講演、発表を行った場合、原則として論文（または要旨）を掲載する。都合により講演者、発表者自身が執筆できない場合には、各会責任者（セッション、部会などがある場合には、その責任者、以下「各会責任者」と記す）が抄録等を掲載する。

2. 原稿の査読

- ・投稿論文については、査読を行う。

3. 締切

- ・投稿論文は9月末日、その他講演会、シンポジウム等での講演、発表は開催後2か月以内とする。但し、12月開催の場合は別途指定する。1月以降に開催されるものについては原則として次年度の研究年報に掲載するものとする。

4. 提出先

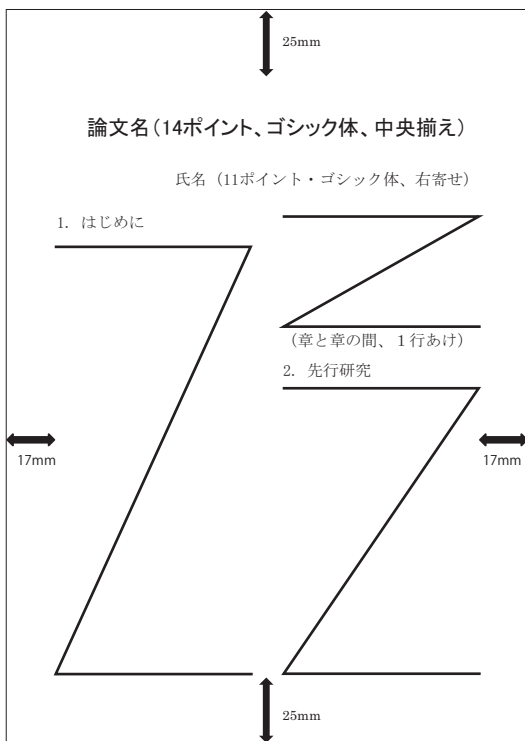
- ・論文は事務局（ccjs@cc.ocha.ac.jp）に提出する。その他、問い合わせがある場合、事務局へ連絡する。

5. 書式

- ・原稿は、規定の書式に基づき作成する。
- ・原稿の種類・枚数は以下の通りとする。
 - 投稿原稿：15枚以内
 - 講演・パネル原稿：10枚以内
 - 研究発表：6枚以内
 - 総括・概要：2枚以内
 - （いずれも、本文・注・図表を含む）
- ・Microsoft Wordを使用。
- ・用紙サイズ：B5判（182mm×257mm）
 - 横書き、22字×38行
- ・余白：上下25mm、左右17mm
- ・本文：2段組み
- ・フォントは下記の通りとし、数字は原則として半角の算用数字を使用する。

	「明朝体」	「ゴシック体」
和文	MS明朝	MSゴシック体
英文	Times New Roman	Arial

- ・論文名：14ポイント「ゴシック体」左右中央
- 副題：9ポイント「明朝体」
 - 前後に全角ダッシュを付ける。
- ・執筆者名：11ポイント「ゴシック体」右寄せ
- ・本文：9ポイント「明朝体」
- ・注：8ポイント「明朝体」（文末注とする）
- ・参考文献：8ポイント「明朝体」
- ・章と章の間のみ、1行あける。
- ・図表内の文字も原則として、本文に準じる。本文との間を1行以上あけること。



6. 原稿提出方法

- ・ Wordの電子ファイルを送付する。
- ・ メールには日英両語で題目と氏名、連絡先（郵便番号、住所、電話番号）を明記する。

7. 使用言語

- ・ 使用言語は日本語とする。但し、何らかの理由により外国語で執筆することが認められた場合には外国語を用いることができる。

8. 校正及び注意点

- ・ 内容、形式面の校正は原則として著者校とし、著者が行う。原則として著者校は初校のみとする。
- ・ 事務局は原則として校正を行わない。
- ・ 校正は原則、電子媒体を通して行う。
- ・ 論文校正と並行し、目次の校正を行う。両者で論文題目や氏名の表記に不一致がないことを確認する。

- ・ 以下に該当する原稿は不掲載、または修正を求めることがある。

- (a) 内容が本部門の活動趣旨になじまないと判断されるもの。
- (b) 内容的に研究論文とは見なせないもの。
- (c) 個人攻撃・差別的表現など、公的なメディアに掲載するには不適切と考えられる記述を含むもの。
- (d) 極めて煩雑な組版上の操作が必要であるもの。

9. その他

- ・ 投稿論文執筆者には、研究年報を刊行時に2冊を贈呈する。抜刷は作製しない。
- ・ 著作権などの処理は原則として執筆者が行う。
- ・ 研究年報に掲載されたものは原則としてWeb（お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション Tea Pot）上で公開される。Webでの公開を希望でない場合は事前に事務局へ連絡する。
- ・ 同様の内容が報告書等に掲載される場合には、本研究年報をオリジナル原稿とする。

第 23 回国際日本学シンポジウムのお知らせ

〈日程〉

2021（令和 3）年 7 月 3 日（土）

〈開催場所〉

オンライン

〈テーマ〉

「近代日本と北欧・ドイツー文学・宗教・ナショナリズム」

ムの展開を、我が国と北欧・ドイツの関係という国際的な視座から再考したい。

〈登壇予定〉

基調講演 パーターセン エスベン氏（南山大学）

研究発表 中丸禎子氏（東京理科大学）

加藤敦子氏（都留文科大学）

兼岡理恵氏（千葉大学）

田中琢三（お茶の水女子大学）

（文責：田中琢三）

本シンポジウムは、明治・大正期における北欧・ドイツと日本の文化交流を、おもにキリスト教とナショナリズムという観点から検討することを目標とする。この交流において重要な役割を果たした人物のひとりが内村鑑三（1861-1930）である。内村の『デンマルク国の話』（1911）は植樹に成功し国力を回復させた理想の国としてデンマークを紹介し、我が国に北欧のポジティブなイメージを流布させることになった。他方で、この思想家が著した『余は如何にして基督信徒となりし乎（原題：How I Became a Christian）』（1895）は、ヘルマン・ヘッセ（1877-1962）の従弟にあたるヴィルヘルム・グンデルト（1880-1971）が翻訳したドイツ語版を契機にヨーロッパ諸国で読まれることになる。またグンデルトは、東京帝国大学独文科のお雇い外国人教師でもあったハンブルク大学の教授カール・フローレンツ（1865-1939）のもとで博士論文「日本の能における神道」を執筆し、フローレンツの後継者としてドイツにおける日本学の第一人者となった。「キリスト愛国」を唱えた内村の北欧・ドイツにおける受容や、宣教師で後にナチ党员となるグンデルトの日本との関わり、あるいはそれらの周辺の文学を探りながら、近代日本におけるキリスト教の受容のあり方と、信仰や伝道と密接に結びついたナショナリ

バックナンバーのご案内

『比較日本学研究センター研究年報』（第1～4号）、『比較日本学教育研究センター研究年報』（第5～13号）、『比較日本学教育研究部門研究年報』（第14号～）のバックナンバーをご希望の方は、グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門（ccjs@cc.ocha.ac.jp）までご連絡ください。1冊 1,000円（送料別）にてお譲りいたします。なお、掲載の論文（一部除外）は、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクションTea Pot（<https://teapot.lib.ocha.ac.jp/>）で公開されています。こちらをご覧ください。

編集委員より

今年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、海外からの先生や学生を招いての国際日本学シンポジウムや国際日本学コンソーシアムについては、中止せざるを得ない状況となりました。例年とは異なる寄稿というかたちで実施いたしました第15回国際日本学コンソーシアムにつきましては、海外の先生方より多数の原稿をお寄せいただきました。また、海外でご活躍されている先生と日本を結ぶ取り組みとして国際日本学講演会を開催いたしました。海外とオンラインでつなぐ新たな試みは、本部門の未来に一筋の光明をもたらしてくれました。ご寄稿・ご講演いただきました先生方、そして、ご参加くださいましたみなさまに深く感謝申し上げます。

部門長が古瀬奈津子から神田由築に変わりました。

表記などについては編集の都合上、編集委員の方で統一させていただきました。

『グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門研究年報』

責任者：部門長 神田由築

2020（令和2）年度編集委員 埋忠美沙 遠藤みどり 芹澤良子 福重恵子

*本年報は、「グローバル女性リーダー育成のための国際的教育研究拠点形成」による成果の一部です。

